

おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成20年
2月号

毎月23日発行
通巻450号

(題字 矢追日聖)

★発行日 平成20年2月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷
★定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★振替口座 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



陸中海岸国立公園 唐桑半島から望む太平洋 青山哲也さん撮影(文・7頁)

昭和38(1963)年2月3日 玉緒祭法話より

世界や地球に祈りを持った信仰を

法主 矢追 日聖(満51歳)

季節の分かれ目

どうぞ皆楽に座って下さい。今朝もお天気はよかったですね。すけれども、またお昼頃からこの牡丹雪が降って参りました。何となく春を思わせるような景色でございます。

毎年、節分が、神社とかお寺の行事として、全国的に行われております。

しかし、この本当の意味というのは、季節の問題なんです。日本の昔の宗教、言い換えれば日本神道のひとつの宗教行事として行われてきたものだと思っております。それが、仏教が日本に入ってからでも仏教と神道とは非常にうまく融和して、節分の行事は行われているんです。

この日本の神道、日本民族が古くより持つておる民族信仰、いわゆる神ながらの宗教は、自然というものを常に対象としておりますので、特に節分という季節の変わり目の行事というものは厳格に行われてきたはずなんです。

今日は、暦の上で見ますと一年間の一番最後の日に当たると言ってもよいんです。冬というものがだいたい今日で終わり、明日から春が立つ、立春です。その季節の分かれ目の象徴的な行事であるんです。

身近な問題では、今年の冬は、最近我々が経験しないような寒波の襲来、北陸や奥羽地方あるいは中部にかけて猛吹雪や豪雪が多かった。そういう自然現象によって、登山者は遭難するし、家が潰さ

れる、水道の管も破裂し、交通は麻痺してしまっ、あるいはまた旋風が起るとか、予期しない色々な被害が続きました。

この地方では丁度、一月十五日の大倭神宮の祭りの時にかの雪が降りました。また一月二十三日の月次祭の日にも、朝から雪が降って銀世界になったけれども、ゴルフ場でスキーするとか、その程度の楽しい雪でありました。

反面、昔から雪や風のため大勢の人が死んでおる、迷惑を被っておるといような場合は鬼の仕業と考えたんですね。人間でも悪い心の人を、あの人は鬼みたいなのやっちゃというように、自然現象のことで、鬼がそうしてるんだと、悪いものに例えてきてるんです。

冬というものは陰気で暗く、鬼の住むような世界である。人間の心も非常に憂鬱になって、冬ごもりするような季節です。ところが明日から春になって、人間の心もだんだん明るくなって行く。その移り変わりの節において、過去一年間の罪穢れとか禍事を受けてきたところの魔の神や鬼が、もう来ないように追い出してしまふんです。

それと同時に自分の心の中に住んでいる鬼、悪い精神状態を一掃して、心の中に福の神を宿す。福の神は陽の神さん、明るい方の神さんです。暗い方の神さんは鬼と例えてるんです。

また自分達の住まいの中の鬼も全部追いやつて、福の神を迎えるというのが、節分の行事の宗教的な意味なんです。毎年話しているのに、別に事新しい訳じゃないんです。江戸時代頃には家の当主が袴を着て行った儀式なんです。

言霊を形どる

この豆を撒くというのは、言霊ことばたまという言葉の霊

魂です。畑で作っておる大豆や黒豆、青豆という豆と言葉が通じますから、マメという音が出るんですね。豆の日じゃないんです。(笑)

人間の堅実な心において、良く働き、小回りの大きく人を気マメ、心がマメであると言う。これは大体健康という意味で、如何なる陰気な悪魔や鬼であつても、マメマメしく働く者には勝てないらしいんですね。だから豆をもつていくんです。その豆でもつて、今年が一番最後の晩の十二時を期して「鬼は外」、そして四日の立春の午前零時を期して「福は内」としていくのが本当なんです。厳格に言えばそんなことやっていると何処もありません。

今日も朝からニュースを見てみると、色んなお寺やお宮さんで、有名人や力士とかをずらつと並べて、豆撒いてお客さんを寄せ集める観光行事のようになってきてるんですね。本当の宗教的な意味というものはどこかへ行つてしまつて、結局それを利用して儲けるというひとつの興業のような形をとつて現在はやつておられる、それがもう墮落しているんです。

これも時代の流れですから、致し方ないんですけれども、皆さん方は本当の節分という意味をよくわきまえてほしいと思うんです。神ながらの宗教ですから、そうした自然の季節というものに形どつて色々な行事が出来てきています。

節分になりますと、年越し鯛と言つて、塩漬けの鯛を皆食べたもんです。私ら最近でも塩鯛食べたいと言ふんですけれども、売ってないんですね。昔はちよつと堅くなつて真っ赤に色をついた塩鯛があつたんですよ。子供時分の味というものは未だに忘れられないものがあるんです。

その鯛を食べて残つた頭を割箸の先に突き刺して、柀の葉と一緒に門口に差しておくんです。門

口の柱が虫喰つて穴空いてるんですね。蜂の子のような白い虫。私はその穴の中へよく箸を突き刺したことも覚えてるんです。町の方はどうか知りませんが、田舎ではまだこういう行事は残っていますから、田舎の人はよく存じておられると思います。

それもやはり宗教的な意味があるんですね。先ほども祝詞の中にあつたように、遠く神代の時代に悪魔を祓つて退散させる場合、ひとつの言い伝えとして、桃の木で弓を拵えて、水の中に生えてある葦でもつて矢を拵え撃つたところが、悪魔はみんな根の国、底の国へパーッと逃げてしまったというんです。

それを後の人が言霊で、「桃の矢、葦の弓」とこう言う時に、桃のイワシの矢になつてしまった葦がハシに変わったんです。

だから塩鯛の頭を箸の先に突き刺して門口に立てておくと、追い払つた鬼どもが、外から矢を見て怖がつて帰つてこないという行事なんです。柀の葉も棘があつて、ちよつと突くと痛いもんやしね。

こういうような行事には何か古来からの言い伝えとかあるいはまた宗教的な意味というものが含まれているんです。自然の法則通りに、神ながらのひとつの形ですから、行事は行事としてまあそれは結構なことだと思います。

心を切り替える節に

しかし節分の行事の日を期して、過去一年間の心の状態や精神内容というものを分析して、自分の心の中にどれだけの思い違い、勘違いあるいは罪悪的な心、人に迷惑かけておるようなこと、良くないことがあつたかどうかということ、よく

反省するための行事であるんです。

よそは節分とか鬼追い式と言ってますが、大倭におきましては今日のお祭りを玉緒たまのおまつり祭と言っているんです。玉の緒の「玉」というのは靈魂、「緒」は紐のことなんです。何かの目に見えないもので結ばれ、繋がって一人一人の肉体に宿っているのが、靈魂と宇宙の大生命というものなんです。

今生きておるといふことも、大自然のこの中において、生かされているんです。我々は一年一年発育もしていくし、年も取って行く。生まれるものがある代わりに死ぬものもできるといふように、世の中は水の流れの如くに変わってきてるんです。これは自然の法則なんです。いわゆる靈魂と靈魂、宇宙の大霊と自分達個人の靈魂というのが結ばれておるその紐を、よく自覚しなきゃいけない。

とにかくその紐が切れてしまうと、息の根が切れてしまうんです。だから命のある間は、その玉の緒は繋がっている。赤ん坊が生まれる時には、臍の緒と胎盤とが引っ付いて肉体を養っているんです。そしてお腹からポーンと出てしまうと、胎盤というものは必要ないから、臍の緒を切って一人の人間になるんですが、生かされておる宇宙の玉の緒が切れた時は、死んだ時なんです。生まれるということと死ぬということは、丁度、裏表の関係になる。そういう大事なひとつの紐を、皆持っているんです。

反省して、良くなかったと思うことがあれば、自分の心から「鬼は外」というように外へ出し、今日の日に綺麗さっぱり洗い流すんです。そして今度は「福は内」と神様の教えに基づいた良い考え方、心の状態でいかなきゃいけないんです。いわゆる神様の心に近いような考えでもって、新しい年を迎える、出発して行くということです。だ

から本当は心の切り替えをするひとつの行事でもあるんです。

大宇宙との繋がり

けれども、その玉の緒にも太いのも細いものもあるんです。細い玉の緒でもって長生きしとったかて半病人のような状態であるんです。結局玉の緒が細くなると弱ってきて、肉体も不健康になつてくるし、心の状態もやすらかではないんです。そこでしつかり太く丈夫なものにしようと思えば、自分の精神状態が一番大事なんです。

とにかく今言うように罪穢れというものをなるべく作らない、そしてまた人との調和をとって行く、言い換えれば誰からでも好かれるような人格を保てる心の状態になる。そういう心になるとひとりだに玉の緒というものは太くなつてくるんです。

少々肉体が病氣したつて玉の緒がしつかりしていたら、直ぐに治つてしまうんですよ。肉体も心も養つて、生かしておる生命の紐なんです。天地自然と我々が結びついて玉の緒を太くしていかなきゃいけない。玉の緒というものは自分の心に繋がっているんです。

だから寝ても起きても頭痛、心配で、皆さんが言う痩せる思いをするとか、近所の噂聞いても腹が立つとか、人がこう言うたからと言ってカンカンになつて弁解に走り回る、あるいは人に騙されたとか、やれどやれどか、とにかく心が安定しなければ、玉の緒は痩せるんです。

常に心に安定と悟りをもち、心配事のない心の状態になれば、玉の緒は痩せてこないんです。何処の世界に行つても心の悩みというものは人間が生きてる以上ついて回っているんです。けれども、

これは自分の考え方や受け取り方によって喜びにもなり、悩みにもなるんです。

肉体上の栄養を取って健康にすることも至極必要ではありません。けれども、いわゆる宗教的な面では、心の栄養を取ることが、今の時代の人においては案外忘れられている。心の栄養というのは、口から喰うもんじゃなく耳から入り自分の心で悟ることなんです。まあ誰からでも好かれ、あの人はいい人だと言われるような、あまり角のない、色の染まっていない状態に自分自身で創っていくことですね。

人間社会のことですから、悩みもあり苦痛もありますが、考えようによつて、ひとつの悟りを持つた場合には、苦痛が苦痛でなくなつてくるんです。心配はお互いにしますけれど、それは心に残らない、また気にならない、そうなつてくれば自然と心に栄養が取れてくるんです。

心に栄養が取れると、自分の玉の緒が段々と太くなつて健康になつてきて、大宇宙の生命、いわゆる大宇宙の大霊というものと、我々の中に授かっているところの靈魂というものが、非常に身近に交流できる、接近してくるんです。電気でも、細い線を通した場合に流れる電気と、太い線を使った場合に流れる電気は、皆さん方も物理的によく分かつておるはずなんです。

まず自分の心に栄養を取つて、そして玉の緒が太くなるように努めていくと、天地自然の恵みや心が身近に感じ、分かつてくる。これはまあ靈感ということになるんです。見ようによつては靈能の發揮ということにもなるんです。

そうなつてくると自分で自分を教えて、人間作りをやつて行く。そういう人が段々と増えて参りますと、社会というものは自ずからよくなつて皆が住みやすい社会になつてくるんです。

人間的向上と霊波長の浄化

一番欠けている精神的栄養というものが、これは宗教でなければ科学ではどないもならない。科学が進歩して物質文化が進歩すると同時に、それと平衡したところの精神文化の発達がなければ世の中は引っくり返る、進行が乱れてくる。言い換えれば裏と表の関係であり、車の両輪のような関係であるんです。車の輪が片方が小さくて片方が大きかったら、真つ直ぐに道は走らない、大きい輪は大きく、小さい輪は細かいんですから、きりきりと同じとこばかり回って向こうへ進まないんです。だから人間の肉体と精神も同じです。

大きくは現代の科学と宗教という問題。原子爆弾のできておるような時代ですから、それに匹敵した精神文化というものがなければいけない。物質文化と精神文化、その進み方が平衡してこなければ、世の中は災いが多くなってくる。

科学者が一つのを発明発見したら、我々がお互いに文化生活をして幸せになるように持つて行ってほしい。ところが原子力でも、それをまず原爆、水爆、あるいはミサイルというような人を多量に殺すような道具に持つて行く。人間の知恵というものが社会を乱し破壊させる。そういう方面に科学が進んでくれば人類は破滅するんです。今、科学と精神文化の進歩がバランス取れてない、それがために世の中がこうした恐ろしい時代になってきている。だから世界的に一番悩んでいるのは、科学と宗教の問題ということになる。

お互いに我々が、自分個人の幸せという小さいことよりも、社会全般の幸せの中においてこそ価値があるんだと、いわゆる社会全体ということを中心として自分の幸せを考えなきゃいけない。そ

ういうような線に持つて行くのが、今の時代においての宗教の在り方なんです。

だから我々の心の中においても、ご利益主義的な信仰をなくし、安定した幸せな社会がこの地球上に訪れるようにという祈りを持つた宗教でなければ今の時代の宗教としては価値がないんです。

大倭の宗教というものはそういった目標のもとに、世界の最高峰を行くような気持において今突進しているんです。今の時代において大倭は高級な宗教であるという自覚と優越感を持つてもらって結構です。我々はこうした宗教でもって世界にこれを伸ばして行く。それによって自分も修養していこうという気持において、信仰を続けてほしいことをお願いするんです。(文責 編集部)

あじさいアルバム ⑧

—法主様と一緒に—

佐渡・民宿「桃華園」平田弘之

一九九一年六月、見田 高橋さんの道案内で、法主様、鈴木母さん、日元さんが来島されました。私達が「是非佐渡へおいで下さい」と何回もお誘いしたのですが、「もうわしは行かれへんな」とおっしゃっていたのに、急に「佐渡へ行くから宜しく」との事で、法主様一行が来るのを、それは楽しみにして一日千秋の思いで首を長くして待つておりました。最初の二日間は、順徳天皇と日蓮上人関係の史跡を尋ね、三日目は島内観光でした。順徳上皇は、承久の乱で、二十五歳の時に、北条義時により、一二二一年七月佐渡配流。一二四二年九月十二日御歳四十六歳で崩御。崩御後七年、建長六年七月二十日、順徳院と追号されました。

佐渡では、慶子内親王、忠子内親王、親王千歳宮が御誕生、それぞれ六十二歳、十八歳、十八歳で薨去。一宮、二宮、三宮という地名の処に陵墓がございます。佐渡への第一歩の御歌「いざさらば磯打つ波にこと間はんおきの方には何事かある」、御辞世「思いきや雲の上をば余所に見て真野の入江に朽ち果てんとは」。



1991年6月26日
佐渡市真野町 順徳天皇御火葬塚 真野御陵にて
後列左より 土井里江子さん 鈴木母さん 法主様
日元さん 見田暎子さん
前列左より 大滝哲也さん 平田緑

日蓮上人は、一二七一年十月二十八日から一七四年三月十四日まで、塚原門答で有名な塚原三味堂で五ヶ月間、その後は一谷妙照寺で過ごされ、『開目妙』『観心本尊妙』『大曼荼羅』等を記された。法主様が、祖師堂の縁の下を這つて奥まで行かれたり、佐渡ムジナの神様二つ岩団三郎のことを「えらい力あるで」と言われたり、燈籠の松の童神さんでは、「そんなだけの童神さんだったら日蓮さんを案内したやろな」等々、今でも鮮明に懐かしい声が聞こえます。母さんは「立ち薨の白い花きれいな」と感心したり、子供達に気を

使ったりしてくれました。日元さんは風島弁天の頂上まで元気に歩いて行かれました。見田 高橋さんは常に、一行の皆さんに気配りし、それぞれの体調も管理しておられました。

法主様達と過ごした佐渡の日々は、永遠に私達一家にとって輝かしい思い出です。桃華園へは大倭会の皆さん、私の菅原園勤務時代の友人職員、住苑者のご家族、昇ちゃんも来てくれました。まだの方は是非佐渡へおいで下さい。歓迎致します。

奈良市 柴地 曉子

この写真は、夫、ダンちゃんを亡くして二年後、平成三年に、初めて文化行事に参加させていた時のものです。法主様は、この旅行中、大変私を気遣って下さり、この写真は大切な一枚です。



「この旅行中……」と書きましたが、法主様とあさんが、平素も常に気遣って下さっていた事に思い至ります。「ダンちゃんが望むようにしてやらなあかんねん」と、法主様は言われ、いろんな事をしして下さいました。夫の急死に立ち直れないでいる私に、「もし後を追って死んでも、ダンちゃんには会えへんのやで」と、私には非情と思えた言葉をかけて下さり、生きてゆかねばならな

いと決意させられた、あの瑞光院での一瞬は今でも胸に焼きついています。

「ダンちゃんが望むように」を、物事を決める時の最も大切なことと思ひ定めて、随分年月が経ちました。今年で二十年目を迎えますが、法主様のお教えのお陰で、姿は見えなくても側に居てくれる事や、子や孫達へのダンちゃんの愛を感じる事ができます。穏やかな毎日を送らせていただき、法主様、かあさんへの感謝の気持ちの尽きることはありません。

北海道 上川郡 東川町 塚田 高哉

私の住む北海道は今、一年で最も寒い時期です。このところは零下二五℃前後の気温が続いています。日中の最高気温も零下一〇℃くらいでしょうか？

こちらでは「寒い！」を通り越すと、「シバレル！」といえます。近所の人たちとの挨拶は、「今朝はシバラタねえ！……そんな言葉を交わしあいます。

燃料代はかさむし、雪も多く、雪かき（家の廻りに積もった雪をはねる）や、排水口が凍ったり、水道管が凍ったりなど大変なことも多いのですが、実はこの時期が北海道の一番美しい季節だといっても過言ではありません。ダイヤモンドダスト（空気中の水蒸気が凍り、ちらちらと舞う現象）も見られますし、雪晴れの青空は紺碧で、心も体も凜とします。月夜に照らされた雪の原はまるで幻想的な蒼い海のようにです。

この法主さまと母さんの写真は、実は大倭を離れてから我が家の祭壇にいつも飾ってある写真です。偶像崇拜はいかんといい法主さまの教えに反していますが、何か心配事や困ったことがあるときなどはいつても写真に向かい祝詞を唱えている私



です。そして、この地に住む八百万の神々に祈るのです。（笑）

あじさい邑 杉本 順一



水野勝美さんの訃報が入ったのは一月三十一日の午前七時前でした。ついにその時がきたかと自分

の覚悟の気持ちを確認しました。「私はご利益信仰から大倭にきました」と言うのが水野さんの口癖でした。

それから法主さんについてくる事三十数年、その教え「地下水のこころ」の見事な実践でした。その朝、法主奥津城に立っただけで、「水野は自分の徳を持って帰ってくるから心配要らん。皆にそう言うてやれ」とのお声がありました。安心です。（※写真は、平成七年秋の一泊文化行事での法主さんと水野さんです）

逍遥遊を求めて…… 痛みと関係性の巻

李 章 根

小さい時に歯医者で怖い目にあつたせいで、歯医者が嫌いだ。

一昨年、虫歯をほっておいたが故に、歯医者で、「メスー」という恐ろしい声を聞くことになった。突然、何の説明も無しでの事だったので、治療中驚きと腹立たしさと痛みで（法主さんの教えは飛んでしまっていた）、気付くと大きく口を開けたまま涙が一筋流れた。先生も若い歯科衛生士さんも、大の大人の男が涙を流している姿には驚いたのではないかと思う。いやはや情けない話であるが、元々こんなになるまでほっておいた自分が悪いので文句の言いようもなかった。（後で、もつての説明不足に関しては医師に伝えた）。

先日、知人に別の歯医者を紹介していただいた。必要な治療を必要な時間だけかけて丁寧によつてくれる。そんな感じを受ける。こんな先生も居られるのかと嬉しかった。今の歯の状態（いい事も悪いことも含めて）と先生の治療方針を気さくに分かりやすく説明をしてくれるし、こちらから話し掛ける余裕（聴く耳）を与えてくれるので、少々の痛みを受ける事があつても安心しておれる。

しかし、急いで何人かの患者さんを同時に治療されていると、先生が咳などしていると、大丈夫だろうかと不安になる事で痛みに対して過敏になつてしまう。

そこで考え方を変えて、「先生はこんなに丁寧に自分の歯を治してくれているのではないか、信頼して任せよう」と思えるとする一と積極的に治療

を受け入れる余裕が生まれるのは不思議だ。僕も鍼灸治療をしているのでいい勉強になった。

痛みはギザギザで尖つたイメージがある。この感覚は、その原因が相手だけ、または自分だけにあるというよりも、関係性や信頼感によつて随分と変化を起すものだなと思つた。

以前、自立生活が出来ようになつたネグレクト（育児放棄）された方のお宅を訪ねた事がある。部屋の半分はゴミの山で占領されていた。あーこれがこの人の心の状態なのかと思うと辛かった。育児放棄をされても体の自然が人を生かそうとするが、迎え入れる土台としての人間関係がずたずたに損なわれてしまつていく。

ケアという言葉は本来、「気遣い、配慮、世話」といった意味を持つ。自然に他の存在を気に出来る、気にももらえる関係の基礎としての人間観

世界観をどこに見出していけばいいのだろうか。

福岡県筑後市 杉山 満丸

08・1・6

12月号には矢部顕さんの文章があり、「あー大倭と今でも関係を持たれて居るんだ」と思いながら読ませていただきました。昨年はインドとアメリカからお客様が見えられ

平成20年 大倭会行事予定

●文化行事●

詳細は各前月までの『おおやまと』でお知らせします。

第297回 4月20日(日)

今城塚古墳(継体天皇陵説がある)とハイボニカのトマトの巨木見学/高槻市

第298回 5月18日(日)

幕末多くの人材を生んだ「適塾」と食事会/大阪市中央区

第299回 6月22日(日) 注意: 第4日曜日

司馬遼太郎記念館&宮本順三記念館/東大阪市

第300回 10月26日(日)~27日(月)

300回記念旅行/行き先: 未定

●文化講演会●

11月8日(土)

(講師) 神谷 文義 さん

共催: NPO法人むすびの家

大倭会へのお誘い

大倭会 年会費 1万円

郵便振替 01060-6-31705

*『おおやまと』の購読だけを希望される場合は3千円

郵便振替 01050-6-67002



唐桑訪問—— 鈴木重雄さんの足跡を辿る

大阪市住吉区 青山哲也

F・W・C関西委員会・NPO法人むすびの家

昨年12月、NPO法人「むすびの家」のメンバーが宮城県気仙沼市唐桑町を訪問した。故鈴木重雄さんの墓参り、彼が設立し初代理事長を務めた社会福祉法人「洗心会」の創立30周年記念式典への参加が目的だ。

鈴木さんをご存知ない方も多いと思うが、大倭とも縁のある人で、紫陽花邑にある「交流の家」の建設に岡山のハンセン病療養所 長島愛生園から参加していた。鈴木さんは唐桑の出身で、東京商科大（現 一橋大）の学生だった昭和10年にハンセン病の宣告を受け、自殺のための旅に出るが死にきれず、愛生園に入園する。園内では偽名の「田中文雄」として30年を過ごした。

彼は在園当時から故郷の発展のために活動し、国立公園編入 国民宿舎の誘致などでは園内で培った厚生省などのパイプも生かして陰ながら貢献した。社会復帰した後には地元唐桑町長選挙に住民の強い推薦で立候補。結果は惜しくも破れたが、「らい快復者」として選挙を闘ったことは、日本のハンセン病者の歴史においても特筆されることだった。「洗心会」は、選挙の後に鈴木さんが設立した社会福祉法人で、唐桑や気仙沼で知的障害者が利用する施設 事業を運営している。

12月1日、大阪 名古屋 東京方面からメンバーが宮城県に入り、仙台から一関に向かう新幹線でほとんどの参加者が合流した。一関には「洗心会」の常務理事である馬場康彦さんが、マイク口バスで我々を迎えに来られていた。「洗心会」を設立する前の鈴木さんと出会い、法人設立のために行動をとるにされた方で、懐かしそうに家族

を迎えるように私たちを待っていて下さった。

一関からは「洗心会」の施設を見学したり、気仙沼漁港で遅い昼食（絶品のまぐろ丼）を食べて、唐桑に向かった。途中、鈴木さんがかつて住まいされた自宅の前を通った。華美なところのないごく普通の平屋で、鈴木さんが今にもふっと現れるような気がした。車内では馬場さんが、唐桑での鈴木さんの思い出を、かみしめるように語られた。「情熱家で、強い信念と意思、そして行動力があつた」と話す馬場さんの目にはうつつすらと涙が浮かんでいた。鈴木さんとの出会い、ともに活動した記憶、そして鈴木さんから受けた薫陶を、馬場さんが今も大切にしているのが伝わってきた。

国民宿舎の「からくわ荘」に着き、宴会場に向かうと、「洗心会」の理事の方々がすでに席についておられた。みなさん鈴木さんの選挙のときに応援した方々で、私たちを歓迎する宴を開いて下さったのだ。今回の旅のメンバーには、選挙応援に駆けつけた矢部顕 青谷善雄 柳川義雄さんが参加していたので、理事の方々と3人は当時は振り返って熱心に語り合った。宴席は34年の時間の経過を感じさせない和やかなものになり、理事の方々は夜遅くまで私たちとの食事を楽しまれた。夕食後には、IDEA（ハンセン病患者 元患者の国際組織）日本法人の理事長をしている森元美代治夫妻が合流された。

2日目。記念式典は午後から開催されるので、午前中は、海蝕によってできた大理石の奇岩が有名な観光名所 巨釜の折石を見物し、洗心会の施設「高松園」を訪ねた。園には職員室に鈴木さん

の仏壇があり、メンバー全員で手を合わせた。別室には鈴木さんにゆかりのある遺品や選挙のときの記録などが並べられていた。当時の記録が大切に保管され、しかも我々が手にとって見られるように展示してあり、洗心会の皆さんの温かい心遣いを感じた。その後は鈴木さんが眠る霊園にメンバー全員で墓参した。空は青く晴れ渡り、鈴木さんが我々を歓迎してくれているようだった。

記念式典は午後1時半から唐桑にある保健福祉センターで開催された。そして第二部は、森元さんが記念講演を行った。鈴木さんについて「人のことでも自分のことのように手助けしてくれた」「神通力があつた。どうしてこんなに人を動かしてしまふのか」と思い出を語った。緊張した面持ちの森元さんの話は、とても時間には収まらなかつた。森元さんは、もつともつと語りたかつたのだろう。会場には森元さんの講演を聴こうと、「洗心会」の職員がいっぱい集まっていた。

鈴木さんは自らの奔走によって設立した「洗心会」が活動を始める直前に、自ら命を断つてしまった（享年66歳）。理由は今も分からない。しかし生前こんな言葉を残している。「自分が働くことによつて、それが人のため、世のためになつてくれればいいのだ。働くことが生きがいなのだから」。鈴木重雄というひとりの人間が「人のために生きたい」とその生を全うし、その情熱が多くの人々をひきつけ、動かしたのだ。

そして妻の佳子さんは夫の亡き後も愛生園に戻らず、夫の姿と重ねるように洗心会の活動を見守られたということだ（享年85歳）。

今回はまさに鈴木さんの足跡を辿る旅であった。そこで感じたのは、34年の時間を越えて、鈴木さんにつながる人々の中に、今も「鈴木重雄」が生きているということだった。

AWTIC日誌

1月13日 禊会。今年の抱負を話し合いました。

1月14日 西の斎庭で「大とんど」。門松やしめ縄等を火にあげました。有志の皆さんによるげんざいや大根炊き、焼き芋の口祭りもありました。

紫陽花邑の中島木綿貴さんが成人式を迎えました。

1月15日 大倭神宮月次祭。

1月16日 午前10時30分から拝殿において70名を超える参列者のもと、大倭殖産棟とその事業を共に支えて下さる協力業者の皆さんの安全祈願祭。

1月19日 午後5時より天平俱樂部で邑交会(大倭の各事業の連絡会)の新年会。

1月21日 大倭病院地下の明り取り用スペースに狸が落下、室外機の電線がかじられました。が、職員等の手で無事助けられ隣接するゴルフ場の山に放たれました。

1月22日 今年5月4日「幕張 九条世界会議」をゴールとする「九条ピースウォーク」一行が3月21日の奈良での宿泊場所として紫陽花邑に協力依頼。日本山妙法寺の加藤行衛さんと宝塚の辻本侑宏さんが来邑されました。

昭和52年にも日本山妙法寺等の一団が東京から広島まで歩く

平和大行進中の6月29日、邑に一泊。その時に法主さんは「吾が内なる平和大行進」(やわらぎの黙示)所収)を書いておられます。

1月23日 大本宮月次祭。昭和39年1月23日の月次祭法話テープをお聞きしました。

1月25日 神奈川県伊勢原市の瀬戸武さん、南足柄市の宮崎育子さんが来邑。

1月26日 昇ちゃんはお年玉も出すとアピール、テレビを青山法義さんの支援で地上デジタルに買い替えてもらいました。

1月31日 大倭会会員の水野勝美さん(享年63歳)が帰幽。(3月20日、午後2時より大倭会館において水野さんを偲び有志で五十日祭のお参りを行います。どなた様もご自由にご参加下さい)

2月3日 玉緒祭。昭和39年2月3日の玉緒祭法話テープをお聞きしました。

2月5日 大倭病院に柴犬が迷い込み職員に保護されました。病院に來られた患者さんの忘れ犬(物)だったとのこと。

2月6日 大倭神宮月次祭。夜、大倭会館で邑倭の会(紫陽花邑の連絡会)。

2月9日 法主帰幽祭。平成6年12月23日の降誕祭法話をDVDで見せて頂きました。

この日、朝9時頃から雪が降り出しあつというまに積雪(写

真)。祭典参加のために家を出たが諦めて家に戻った方や車で奈良まで来たが通行止めになった方、車の渋滞で遅刻の方などがありました。そのため午後1時半からの奥津城での合同参拝は中止となったり、祭典後の紫陽花邑の守護霊四神参りも拝殿で行われるという異例づくめの祭典でした。



矢追房子さん 写

中島木綿貴さんが専門学校の研修旅行でアメリカへ出発(16日まで)。

2月10日 禊会。大倭安宿死では(菅原園)

1月17日 住苑者皆さんと、新たな目標を掲げながら鍋をつつきあいました。

2月4日 節分の集い。住苑者と職員で豆まき合戦。(須加宮寮)

1月24日 去年に引き続き木村社中さんの演奏会。

1月30日 昼食はホットプレートを使つたちゃんこ鍋。みんな普段よりたくさん食べました。(長曾根寮)

1月10日 デイサービスの新年会。百歳を迎えられた方のお祝いを共にしました。

1月11日 音楽クラブ。ポランティアの方々と唱歌等を合唱。

1月28日 15名の方によるハーモニカ倶楽部「ラルゴ」の演奏(デイサービス)。

【俳句の風物】上田森彦(97歳) 中年や独語おどろく冬の坂 西東三鬼

主題は己が心の動き。景は読者の心で画かせて、読者の共感、連想にすぎず。作者は1900く1962の人。 冷えますねボツリと話す駅の朝 森彦

(八重垣園) 1月16日 茶道クラブの初釜。俳句投稿箱より 「般若心経唱えつつ見る雪景色」「しんしんと降る雪眺め目覚めたり」「卒寿とて腰曲げつつも初句座へ」

編集後記

▼大倭に生まれ育ち半世紀。今自分のできることは何か?と考えると同時に、法主さんに仕え、大倭の担い手の一員として頑張つてくれている両親に代わり微力ながらもお役に立ちたいと思う。両親の代役は簡単ではない。兄弟姉妹、夫婦が仲良く暮

らせるのは法主さんと大倭のお陰かな? 日々感謝。(千)

ATM i C

* 月次祭(大倭神宮) 3月6日(木) 午後2時より大倭神宮にて。

* 大倭会主催第四七一回禊会 3月9日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

* 月次祭(大倭神宮) 3月15日(土) 午後2時より大倭神宮にて。

* 月次祭(大本宮) 3月23日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

追記 クロガネモチについて

前月号の五ページの「大倭あちらこちら」でクロガネモチを取り上げましたが、大倭会の会員で植物に詳しい川端一弘さんから指摘があり、一部内容を修正しておきます。 この木の赤い実がすぐに鳥に食べられてしまふと書いたのですが、ある自然の摂理で、三月まではほとんど食べられずに残っているそうです。たしかに、二月八日現在で実はほとんど残っています。川端さんは、「これはクロガネモチの戦略で、自然界のバランスの妙に感じします」と述べておられます。

* * * (岸田 哲)

* * * (千)